

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫



◆◆◆ No.0553 ◆◆◆

19/10/02

【 まだハリケーンシーズン、「10月相場も荒っぽい値動き」に注意!? 】

先日終了した9月相場は、月間の変動幅が2.7円ほどにとどまった。9月4日付の当レターで指摘した「動くときには大きく動く9月相場」とまでは言えなかったようだ。やや期待外れに終わった感も否めない。ただ、そんな9月相場が「大きく動く」としていた背景のひとつに、筆者が挙げているのは「ハリケーン」。実際、マーケットで格言のように指摘される話として、「ハリケーンシーズンの為替市場は荒れ易い」というものがある。そして、そんなハリケーンは何故か(?)足もとの10月も健在で、2日夜から3日にかけては九州北部に甚大な被害を及ぼす可能性も取り沙汰されていた。10月のドル/円相場も大いに注意する必要があるのかもしれない。

◎経験則的には「ドル高がやや有利」だが……

経験則の観点から10月相場を見た場合、まず1990年以降昨年まで過去29年間の戦績はというと、17勝12敗でややドル高有利となっていた。これには需給的な裏付けも指摘されており、具体的には「日本勢による下半期外債投資」と「米企業による年末をにらんだりパトリエーション(運用資金の本国資金還流)」の2つが挙げられている。実際、2011年から2017年まで7年連続で「ドル高・円安」が進行していたが、昨年は逆方向の動きで連勝記録が途切れる格好となった。あまり、経験則を鵜呑みにすることもリスクが高い気もしないではない。

また、それとは別に10月相場には「まったく動かない」か「非常に激しい動きを示す」か、ふたつにひとつで両極端な値動きを示すことが少なくない、という別の特徴も見取れる。うち「10月の大変動相場」の事例を取り上げると、大手ヘッジファンドLTCM破たんの余波を受け、変動相場制以降で一日あたり最大級の下げ幅(1日約12円下落)を記録するなど、月間で25円以上も動いた1998年になるだろう。また2008年の10月も変動幅15.67円を記録し年間変動幅1位となるなど、ときたま狂ったような大相場・荒れ模様の変動をたどることもあることは、頭の片隅にでも留めておきたいところだが、ここ数年は逆に「まったく動かない10月相場」となるケースの方が多そうだ。

一方、そんな為替市場を横目ににらみつつ、10月の株式市場は荒れる展開をたどることが多い。とくに米株市場にその傾向が強く、それが「悪魔の棲む10月」という言葉を生み出していることも良く知られているところだと思う。分かりやすい事例を幾つか取り上げるだけでも、米株市場を震撼させた過去の3大暴落「ブラックサザデー(29年)」「ブラックマンデー(87年)」「ブラックチューズデー(89年)」はすべて10月の出来事だった。為替や株など個別ではなく、10月相場は金融市場全般にしっかりと注意を払う必要があるのかも知れない。とくに、米株のなかでもNYダウは一時調整が入るも底堅く、再び過去最高値更新も視界内に捉えられているだけに尚更だろう。ただ、「ダブルトップ」を示現し、本格的な下押し局面入りするといった弱気な見方をする参加者もチラホラ観測されているようだ。

最後に、相場から離れた視点、ニュースについてみると、筆者が「何故か大事件も起こりやすい」とレポートした9月に続き、10月も日本を中心とした金融機関、なかでも生損保の破たんなどが目につく状況となっている。一例を挙げると、「独ハンブルグや米NYで金融恐慌(1907年)」「山一証券の“とぼし”発覚(93年)」「京都共栄銀が解散発表(97年)」「長銀国有化(98年)」「千代田生命が更正特例法申請(00年)」「大和生命破たん(08年)」――などとなる。もちろん、それらのようなニュースは毎年確実に起こる、というものではないが、筆者の取材でも、日銀による長期的な低金融政策により疲弊している金融機関は決して少なくない。いまの時代、何があっても不思議はないという心構えでリスク管理をしっかりと行っていただきたいと思う。(了)



当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。

なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。

